
文学少年

どんぐり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文学少年

【Nコード】

N11117R

【作者名】

どんぐり

【あらすじ】

図書室に通う男女の話。

春日くんは珍しい趣味を持つ。

珍しい、とういのはちよつと不適切なのかもしれないが、私にとつてはその言葉がともしっくりくる。

なにせ、春日くんは読書が好きなのだ。しかも、ライトノベルや大衆小説より、むしろ文学小説を読んでいる。そんなことを趣味としている高校生なんて、早々お目にかかれない。私の知る限りでは、春日くんだけだ。

「面白い？」

図書室で読書に励む春日くんに尋ねた。

「うん？ ああ、古賀さんか」

本から顔を上げ、春日くんが隣にいる私の方を向いた。

目にかかりそうな長めの髪。その下にある、優しそうな瞳。

「そうだね。面白いんじゃないかな？」

なんで疑問形？自分が面白いと思っているなら、素直に面白いと言えればいいのではないだろうか？

窓際の一番端の席。春日くんがいつも隠れるようにして座っている、その席の隣に腰を下ろす。

「どの辺が面白い？」

タイトルは、「舞姫」。作者、森鷗外。

いつだったか書店で見かけた時、ちよつとだけ内容を確認したことがある。昔の小説だからか、どうにも難しい表現ばかりで読むのを止めてしまった。ただ、インターネットで調べてみたら、あらすじくらいは知っている。主人公はひどい人だと、よく知りもしないで思った。

腕を組む春日くん。学ランを来て腕を組む姿は、なんだか応援団長みたいだ。体格は文科系の人間なのだけれど。

数秒間考えていたかと思うと、春日くんは徐に口を開いた。

「うーん。それはよくわからないな」

わからないのか。変なの。

放課後の図書室には、私たち以外の人なんてほとんどいない。いるのは、カウンターでマネキン人形のように鎮座している事務員さんと、椅子を並べてベッド代わりにし、ぐうぐうと眠りこけている男子生徒のみ。図書室なんて、もはや本を読むための場所ということはない。机を並べた物置、と言ってもいいのではないだろうか。

「じゃあ、なんでわざわざそんなもの読んでの？」

「面白いから、かな」

ダメだ、こりゃ。

「つまり、なんだかわからないけど、とにかく面白いんだね。好きなものは好き。嫌いなものは嫌い。そこに、何か特別な理由は必要ない、と」

理由はわからない。好きだから好き。

そう言っていた昔の彼氏は、何の前触れもなく、ただ好きでなくなった、という理由だけで私から去っていった。春日くんも、そういうタイプの人間なのだろうか？

そう考えて、ちょっとだけ落ち込んだ。私はこういうタイプの人間が好みなのだろうか？いつ終わるともしれない、好きだから好き、という繋がりしか持たない関係を、私は好ましいと思っているのだろうか？

「好きなものは好き、か。うん。たしかにそんな所あるな。実際、オレは読書が好きだけど、どうして好きなのかって聞かれたら、好きだから好き、って答えるしかないと思う。あんまり深く、その理由は考えない」

そんな頼りないことでもいいのだろうか。明確に示さないとしても、少なくとも、だいたいのところくらいはわかっておいた方がいいんじゃないだろうか。読書が好きなら、自分では経験できないことを体験できたり、知ることができたりするから、とか。もしくは、表現が絶妙で、その言語感覚が面白い、とか。

何も、とある小説の中に出て来る「木の怒り」は、環境問題を扱っていて、云々、などと述べて、その小説の価値を論じるようなことをしないにしても。

ともあれ、そんなことをここで議論するつもりはない。もつとも、そのつもりであつたとしても、春日さんと議論してもたいした結論には至らないと思う。

「そっか。なんで女の子は甘いものが好きなの？好きだから好き、なんてね」

私は鞆から教科書を取り出して、机に広げた。

「なんだ。またわざわざ宿題しに来たのか。学校の図書室って、そんなに快適？」

快適だよ。だって、春日くんがいるから。

そうは言わずに、私はただ当たり障りのないことを口にする。

「家だと落ち着かないんだ。テレビとか雑誌とか目に入ると、どうも気が散っちゃってね」

「そっか。オレも、家にいるとゲームとかパソコンに目が行っちゃうからな。ああ、でも隣で勉強されるとこっちはちよつと落ち着かないな。オレも勉強しなきゃ、とか思ってしまう」

私は春日くんの邪魔になっているのかもしれない。そんな考えが頭を過つたけれど、ここを離れてしまうのは惜しい。

「別に、人に合わせることはないでしょ。自分のペースでやればいいんじゃない？他人は他人。自分は自分」

「それもそうだな。わかった。オレは必死で頑張る古賀の隣で、んびり読書だ」

それはそれでなんかむかつく。

そう思いはしたけれど、嫌ならここを去ってしまえばいいだけで、そうしない方が悪いのだ。後から来ておいて、どっかいけ、なんて言う訳にはいかない。

「何か面白い本あったら紹介してよ」

筆箱からシャーペンを取り出して、カチカチ、と芯を出す。

「……「吾輩は猫である」、「こころ」、「雪国」、「人間失格」。
うーん。面白いとは思うけど、推薦するのは難しいかも」
確かに。

文学少年に本の紹介を頼んだ私がバカだった。私は大衆小説でないと読むことはできない。

「何か特別いいのがあったら教えてよ」

春日くんは、うん、と頷いて読書に戻った。私も勉強に取り組み始めた。

教科書をめくりつつ、私は思う。好きな人の隣は落ち着く。そう思うけれど、それでいいのだろうか？本当に好きなら、こんなに落ち着いてはいられないのでは？

男女が揃って、ただ黙々と己のことだけに関心を寄せる様は、どうもシニールだった。

好きだから好き。彼は言った。

優しいところが好き。私は言った。

この言葉に、どれほどの違いがあっただろう。好きだから好き、には全く原因がない。でも、優しいところが好き、というのにもたいた説得力はない。優しいところが好きならば、私は世の中に存在する「優しい男性」全てに恋しなければならぬ。しかし、もちろん私はそんな風に人を好きになることはない。「優しい」と「好き」には、明確な因果関係はないのだ。

それでも私が好きだったのは彼で、他の誰でもない。彼でなければならぬ理由はなんだったのか、私にはどうしてもわからない。そして、どうして私が春日くんを好きなのかも。

「……「走れメロス」」

春日くん差し出した本を見て、私は呟いた。

今日も今日で図書館に行けば、春日くんは定位置に座っていて、穏やかな笑みを浮かべてその本を差し出したのだ。

正直に言えば、ちょっと驚いている。本を紹介して、とは言った

けれど、ほとんど期待などせず、社交辞令と紙一重の依頼だったから。

「うん。たぶん、それは面白いんじゃないかな？」

まあ、そうだけだね。私も面白いと思ったよ。ただ。

「『走れメロス』は中学校の教科書で読んだな……」

「あー、そっか。そっちでもやってたのか。どうかなあ、とは思ったんだけどさ。じゃあ、これは回収しておこう」

春日くんは残念そうに言った。手を引っ込めようとしたのを引きとめて、私はその本を手取る。

「いや、いいよ。久しぶりに読み返してみる。昔とは感覚変わってるだろうし」

「そう？　そういうならそれでいい」

安堵したように微笑んだ。

勉強道具は鞆の中で、その本を開く。紹介されたからには読んでおこう。あまり長々としたものであったらちよつとためらってしまうが、これは短編。三十分もかからない。

春日くんはそれきり読書に戻る。私のことなど、すでに存在しないかのように。

……「伊豆の踊子」。春日くんが今読んでいる本。

春日くんの好みはよくわからない。春日くんの読む本には一貫性がない。ただ気の赴くままに、手当たり次第読んでいるように見える。

春日くんの読んでいた本を思い出して、どこか共通点があるかと探ってみたが、「本」、「小説」、「文学」というぐらいでしかない。やはり、適当に読んでいただけか。

そう結論づけて、私は目の前の活字に意識を集中した。

二十分後、その本を読み終わって、ふと疑問に思ったことを尋ねた。

「別に責めてるわけじゃなくて、ただ純粋な疑問だから気をわる

くしないでね。この本のどの辺が、紹介するのにふさわしい思った？」

面白かったから、と答えるかと思えば、珍しく春日くんは別のことを言った。

「なんていうか、わかりやすい面白さがあるから、かな」

「わかりやすい面白さ？」

奇妙な形に歪んだ自分の顔が、窓に映り込んでいた。

「うん。だって、それ、面白いだろう？」

「まあ、うん。面白いね」

「どうして面白いか、わかる？」

逆に尋ねられてしまった。しかたなく、私は思ったままを口にする。

「メロスが、自分の命を失うとわかっていても、友人を助けに行くところが感動的」

一言で言えば、そういうことだろう。

柔らかな笑みを浮かべる春日くん。

「そうだね。それはつまり、いわゆる「売れ線狙い」というやつだ」

「……「売れ線狙い」、ねえ」

文学作品の一つを、「売れ線狙い」と言い切るか。言われてみれば、確かにそうだと思う。太宰治先生には珍しい、感動的な短編小説。

「結局のところ、人を感動させやすい話なんて決まってるんだ。病弱、子供、動物。そんなものが出て来る話は感動的になりやすいって聞く。同情を惹きやすい、とも言えるかもしれない。そういう、感動的になりやすい要素のことを、オレは「わかりやすい面白さ」って呼んでる」

「なんだか見も蓋もない言い方」

そんなことを言われると、今まで感動してきた小説や映画やドラマが色褪せて見える。感動させることを目的に、感動させやすいも

のを取り入れたもの。それだけ。

「でもね」

「うん？」

「おかしいことに、そういった『感動的になりやすいもの』を適当に詰め込んだだけの物語は、決して感動的にならない。むしろ人の心を冷やしてしまうだろうね。例えば、「友人のために命を投げ出す少年の物語」を小学生が書いたとしても、それは「走れメロス」ほど感動的にはならない。なんだこれ？なんて思わせるだけ」

「まあ、そう言われれば、そうかもしれないね」

それで、結局何が言いたいんだろう？何か私に伝えたいことがあるのだと思うけど。

「だから、結局は全部が必要だと思うんだ」

「全部？」

「何かを面白いと思わせるなら、ただの断片ではできない。感動的な台詞を一文だけ抜粋して持って来たって、それは人を感動させるには至らないことが多い。小説を構成する全ての要素が揃って、人はその小説を面白いと感じる。ストーリー、表現、比喻、などなどいろんなものが揃った時にね」

例えば、ストーリーが非常に素晴らしくて、でも小学生レベルの語彙しか使われていない小説。そんなものは、稚拙すぎてあまり読む気がしないな。

「それで、なにが言いたいの？」

あまり話を長々と聞いていてもしょうがないので、要点を尋ねた。せつかな私に、春日くんも苦笑い。

「オレが言いたいののは、つまりこう言うこと。オレはよく、理由もなく「面白い」とだけ言うのは、どの要素が原因だとか決められないから。「吾輩は猫である」に出て来る、絶妙な猫の視点は面白い。でもそれは、言語表現の面白しろさにも支えられている。「面白い」を構成するパーツのどれを抜き取っても、オレは自分の感じている面白さを言い当てていないと感じる。だから、面白いから面

白い、がオレの読後感」

「……そっか」

ならば、優しいから好き、なんて言うのはただの言い訳の様なものなんだ。そんな風に、「私が好きになる人の要素」の一部を抜き取っただけでは、理由になんかならない。

優しいから好き。でも、時に思い切りケンカできる所も大事。それに、厳しい意見を言ってくれるのもいい。加えて言うなら、そのルックスも好み。こう言ったことが全部集まって、絶妙なバランスを取っている時、私は人を好きなるんだ。

そういう意味での、好きだから好き。これが、好きになることを表現する、一番適切な言葉。

もっとも、「好きだから好き」と言っていた彼は、こんなことを考えてはいなかっただろうけれど。

「うん。参考になった」

思わず呟いた私を見て、春日くんはきょとんとしている。

「何の参考？」

そういえば、会話の文脈上は、恋愛についての考察なんて無関係だ。

「なんでもない」

なんだかおかしくて、私は頬を緩めた。

微笑む私に、春日くんは首を傾げ、やがて読書に戻っていった。

はぁ。心の中だけで溜息を吐く。私はいったいなにを考えていたのだろう。

彼にふられて以来、誰かを好きになるには何か明確な理由が必要だと思っていた。そうでなければ、きつとまたわけのわからない理由でふられてしまうと思っていたから。

でも、そう難しいことじゃないんだ。いちいち、人を好きになることの理由なんて細かく分析することはない。

私は春日くんが好き。それはなぜ？

穏やかだから好き。……何か違う。

理性的だから好き。……これも違う。

頼りになる所が好き。……これだって決定的じゃない。

当たり前だ。私はそんなことで人を好きになったりしない。何か一つに要素だけ引っ張って来てその人を好きだというのは、「顔がいいから好き」、と言っているのと変わらない。

私は春日くんが好きだ。だって、春日くんが好きだから。

もう、これでいいんだ。だって、これが一番に私の心を表現している。

隣で黙々と読書が続ける春日くんを見た。相変わらず、私のことなんてまるで存在しないかのよう。でも、それがいいんだ。女の子が隣にいただけで、態度を急変させる人なんて私は嫌いだから。

「好きだよ」

声に出さず、唇を動かしてみた。当然、春日くんは気付かない。気付いて欲しいけど、でも気付いて欲しくなくて、もどかしい。

ああ、そうか。悩みが解決したと思ったら、今度はもっと大変な悩みが生じてしまった。

好きの理由がわからないうちは、告白なんてしないと決めていた。だから、こんなこと考えなくてよかった。でも、今は違う。

どうやって春日くんに気持ちを伝えよう。いつ、どこで、どうやって、どんな言葉で？

ダメだ。そんなこと考え出したら、もう勉強なんて手につかない。

私は鞆に伸ばした手を引っ込めて、春日くんが貸してくれた本を開いた。内容なんて入ってこない。怪しまれないよう適当に目線を動かして、適当な間隔でページを捲る。

走るのはメロスだけでいいのに、私の頭まで暴走し始めた。

(後書き)

またもや頭でっかちな話になってしまったようです。
読了、感謝します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1117r/>

文学少年

2011年10月8日19時16分発行